目　次

林　巨樹先生略年譜・著作目録……3
国語の文章……林　巨樹……24
『一歩』覚書――「ふのぬをはんぬ」の別――……飯田晴巳……38
『平家物語』諸本と『吾妻鏡』に見られる将門・秀郷邂逅説話について……真野須美子……54
『仁和寺宝庫大日本神楽書紀』（資料紹介）……清水眞澄……70
奄美大島方言の研究――地名呼称の古層を求めて――……春日正三……左1
語彙記述の試行過程から――「ことば典」をめざせば――……植村悠太朗……左20
島原半島方言の文末助詞……古瀬順一……左39
形容詞の装定用法と述定用法……秋元美晴……左76
「会話の公理」の階層構造――良寛「戒語」を題材として――……北村弘明……左87
『英語箋』の編纂意義――『改正増補蛮語箋』の削除及び改変をめぐって――……酒井和子……左107
附『英語箋』の語彙索引及び会話文索引
無意識を表すとされる副詞「ふと」の談話機能について……川井章弘……左155
雑誌にみる直喩表現――「よう（だ）」「みたい（だ）を含む文について――……糸川優……左169

執筆者一覧……279
献呈の辞……285

林　巨樹先生略年譜・著作目録

まへおき

先のわたくしの華甲記念の『甲子論集』の巻末には、嬾哉　荻庵先生年譜（林　巨樹教授年譜）と林　巨樹教授著作目録が載つてゐる。嬾哉は怠ケ者ダナアといふ意味で、今から言ふと五十五年くらゐ以前に蔵書印を作らうと思ひ立つた時に卒然「嬾哉書架」と彫つた、それだけである。何しろ男々しくなくては人間あつかひにされない時代なので、懶でもよいところを、わざ〳〵嬾にしたらしい。荻庵は戰争で焼け出されたあと、父が荻窪に住居をみつけてくれた、その記念である。世に奮闘的人生といふものがあるとすれば、わたくしの場合その反對で、中學生の頃から人生の理想は横町の御隠居であつた。勿論はじめから横町の御隠居になれる訣はなくて、随分、それこそ分に随つて働いたのは御覧の通りである。けれども志は隠居にあつて、荻庵老人は荻窪ノヂヂイくらゐの戯號である。

「嬾哉」も「荻庵」も、それこそ巫山戯けて口にしてゐたところが、年譜を作り著作目録を作つてくれた飯田晴巳君がいたづら心を起こして、冠せて版に付してしまつた。今回『甲戌論集』に又、年譜、著作目録を付ける、手入れしなさい、と言はれて、うむうむと安請合をしたものの、それこそ嬾哉であつて、一向に捗(はか)が往かない。著作目録も嘘ではないにしろ蕪雑をきはめ、整理するのも大儀である。あきらめて、ほんのちょっと注解を加へ、少々の削除とあらあらの追加項目を添へるに止まつた。

横町の隠居論の追ひ書き

国語の文章

林　巨樹

一、国文の系譜

人というものは――と開き直るまでもなく、人は自己の生まれ育った環境になずんで、自分はどんな生き方をしているかを見失いがちなものである。これは、言葉の世界でも例外ではない。だから、ゲーテは、

Wer frmde Sprachen nicht kennt, weiß nicht von seiner eigenen.（英訳 He who is ignorant of foreign laguages know not his own.）

というようなことも言った。「外国語を知らない人は、自分の（国の）言葉をも（本当は）知らないのだ」というのであろう。「外国語を知ることによって、私たちは初めて自国語を知ることができる」という訳を用意した人もある。

突飛なたとえかもしれないが、いま我々が用いている右縦書きにしてからが、どうであろう。かつては文字の配列は全く自由であった。ブウストロフエドンといって、牛が畑を耕すように左から横に文字をならべて行って、紙面（?）が一杯になると、折り返して右から左へと文字をならべて行く流儀もあったと聞く。そんな中から生まれた流儀は大別して、

ア、左横書き――今日の欧文流儀
イ、右横書き――アラビア文字の流儀
ウ、左縦書き――かつての蒙古文字
エ、右縦書き――漢文、あるいは今日の我々の（新聞雑誌の）文章

の四種であった。欧米その他ラテン文字圏の人々は、文字は左から右へと横にならべられるものとしか思っていない――ごくまれな例外として、ビルディングの側壁にＨＯＴＥＬなにがしの表示を見ることはできる。アラブ系の人々にとっては、右から左へと横に書くのが流儀であった。

我々の流儀は、範と仰いだ中国文の流によって、右縦書きであった。さて、文字や、語法や、語彙や、修辞のうえで、どんな変化があったのか。「国語の文章」は、そんな関心から生まれたのであった。すでに、漢字かな混じり文という現代文の基礎となった表記そのものが特色的であった。

このように見ると、「国語の文章」はおおむね、

ア、漢文体
イ、和化漢文体（東鑑体、記録体）
ウ、漢文訓読体
エ、宣命体
オ、和文体
カ、擬古文体（雅文体）
キ、和漢混交体
ク、候文体